夕張岳登山

札幌市　高野英二

夕張岳（1,667.8 m）には、いままでに2回登山を試みたが、いずれも雨のため大夕張の街まで行くのであるが残念ながら登山を断念して札幌に引き返していた。元気なうちに是非一度登っておかなければ後に悔いを残すと思いつつその日の到来を待っていた。7月のある日北広島に住む息子が遊びに来て、夕張岳に登りユウバリコザクラシソバキスミレの自生地の写真を撮りたいと云う。好機到来とばかり早速登山の仕度にとりかかり札樽地区に住む2～3人の草友にも電話をして同行を勧めたが、いずれもご事情があって行くことが出来ず、結局は腰の重い妻をどうやら説得させて、身内だけの登山となってしまった。

夕張山脈の植生と植物相の概況等については、当会会誌に野坂志朗氏が詳細に記されておられるので、登山前に熟読しておおかたの知識を頭に入れた。又、書店よりガイドブックを買い求めて登山コース等について確認をした。登山には夕張側と金山側の2つのコースがあるが、そのいずれのコースともアプローチが長く、従来までは夕張側コースであれば登山口近くのヒュッテで1泊するのが常であったが、登山道の整備のため札幌を早朝に出発すれば、その日のうちに登って帰れる程に夕張岳は近くなった。

昭和59年7月29日（日）晴

午前3時起床。準備を整えて4時、息子の車の運転で自宅を出発する。本日の天気は、昨夜の気象衛星ひまわり2号によると北海道上空には雲らしい雲がひとつもなく予報も晴であった。雨男の私にとって雨の心配がないということはまことに爽やかである。車は札幌から栗山を経て大夕張へとひた走る。早朝なので行き交う車も少なく快適なドライブである。車窓から眺められる広々とした草原には朝の光が照り輝き北海道ならではの美しい景色である。大夕張に入ると間もなく右手にシュウパロ湖が見えてきた。この湖はシュウパロ川を塞き止めて造った人造湖で水の色は炭砿地帯を流れる川特有の黒褐色を呈している。夕張山脈の遠望は、車窓からではなかなか望む位置がないのであるが、よく気をつけて見ると2ケ所ほど遠望のきく場所があった。車を止め写真を撮る。夕張山脈は朝靄の中にかすかに頂上部分のみを現していた。妻はこれからあの山の頂上近くまで登るのかと心配気に云う。

明石から左折して林道に入るとペンケモウユウバリ川の渓流が見えてくる。林道はこの川に沿ってどこまでも続く。以前まではかなりの奥まで営林署の軌道が通じていたが、いつの頃からか撤去されて軌道跡が車の通る道となってしまった。補修がないためか車の上下動が激しい。又、落石の危険のあるところも数ケ所見られた。道路巾

は狭く行き交う車は、そのどちらかの車が適当な場所で道をゆづらなければ走れない。しかし、以前はこの軌道に沿ってヒュッテ（収容人員50名）まで歩いたことを思うとまことにありがたい道である。この林道はヒュッテの500 mほど手前の木橋を渡ったところで終点となった。車から降り腰を伸ばして大きく深呼吸をすると、渓流のせせらぎが近くに聞こえ、山の冷気が寝不足の体を心地よく引き締めてくれる。駐車場には既に7～8台の車があった。前日から登山に来てヒュッテに宿泊した人たちの車が大半のようである。時間は午前9時であった。

早速登山の仕度をして冷水コースから登る。夕張側にはこのコースのほかに馬の背コースがあるが水場がないので下山の時に通ることにした。トドマツの林に入り右手に渓流のせせらぎを聞きながらゆっくりとした歩調で岩の多い坂道を登っていく。リュックは日帰りなのでさほど重くはないが山に馴れるまでの30分間ほどは吐く息は荒い。時折涼しい風が吹き抜ける。足を止めてしばらく休み再び歩き出す。ウグイスが透き通るような声で鳴きながら私たちの後をついてくる。第一の水場でしばらく休憩する。冷水コースという名のとおり冷たい沢水がホースの先から勢いよく流れ落ちている。乾いた喉を潤し空になった水筒に満たす。美味しい水であった。第二の水場に向ってさらに登って行くと、トドマツの林がいつしかダケカンバの林にとかわっている。いよいよ高度があがってきているのである。時折樹間からコマドリの声が聞こえてきた。息子が大学に入って間もない頃、平山（1,775 m）に登り支湧別川上流にキャンプした時に、朝早く渓流のせせらぎの中にさえ渡ったコマドリの声は忘れられない。このあたりは、アリドウシラン、コイチョウラン、などラン科の植物が咲いているとのことであるが見られなかった。ただし、ゴゼンタチバナ、サンカヨウの葉が多く見られ、開花期の頃はさぞかし美しいことであろうと想像しながら歩いた。第二の水場をすぎてしばらく登ると馬の背コースとの合流点に到着した。このあたりは標高（1,150 m）で、この地点から道はひとつになっていよいよ夕張岳へと続いていく。一歩一歩と高度をかせぎながら急斜面を登りつめて来たが、ようやくにして尾根道となり歩きやすく視界も広がった。前岳斜面を左にまわりしばらく進むと展望台に出る。足下は灌木に被われて見えないが断崖絶壁になっており、姫岳（滝の沢岳1,352 m）が近くに見える。北方に芦別岳（1,726.5 m）が見えるとのことであったが確認出来ず残念であった。妻は登山口から30分程のところまではかなり疲労していたが、ゆっくり歩く私の歩ゆみに合わせているうちに体調もよくなり、どうやら、目的地のガマ岩まで行く見とおしが出来てほっとする。

前岳の北東斜面を過ぎると憩の沢の水場に出る。この水場附近から除々に湿原の様相に変ってくる。前岳湿原は昨日の雨で登山道はぬかるみとなり、キャラバンシューズは泥に埋没する。道の端のややかたい草地を見つけては飛ぶようにして歩く。イワオトギリ、ウサギギクが見えだした。当会

誌第3号に野坂志朗氏は次のように記しておられる。「本岳と前岳との間に東西約1㎞の帯状に広がる蛇紋岩台地は、滞水のために標高1,400ｍのミズゴケ湿原となって夕張・日高両山脈を通して唯一の大規模な湿性お花畑となり、周辺の河川源流沿いの斜面は相当程度の蛇紋岩崩土帯となって、まばらな不安定群落が見られる。崩土帯には、超塩基性岩特生植物を主とする独得の群落が成立する。」今年6月に静狩湿原を探訪したが、同じ湿原でもその低湿な状態と比較してその植生には大きな相違のあることがうかがわれる。ガマ岩が姿をあらわしてきた。ガマ岩という名前がどこからついたのかわからないが、いかにも肌黒いガマガエルが背中をまるくして両手でふんばっているように私には思えた。近づくにつれ超塩基性岩の地層が黒々と光り輝いていた。

ガマ岩に着いたのは午前11時30分頃であった。岩場の礫地を伝って南西部の突端に行く。太陽は燦々と照り湿原を吹き抜ける風は心地よい。空は青く澄みわたり白い雲が浮ぶ。汗に濡れたシャツを脱いで岩場に干し疲れた体を休めながら昼食をとる。周辺に咲く花に目をやると、リシリゲンゲ、ミヤマアズマギク、タカネタンポポ、タカネナデシコ、オオイワツメクサ、などが咲いていた。夕張岳に登る人、登山を終えて帰る人たちは、手を振りながら過ぎていく。突然十数人の若者がやって来て花の図鑑を片手に写真を撮り出した。いつの頃だったか、黒岳登山の時に「花は採らずに写真で撮ろう」という標語めいた注意書きがあったが、これからの高山植物に趣味を持つ人たちは、このようでありたいと思った。探していたユウパリリンドウ、シソバキスミレはこのあたりでは見られなかった。妻は引き返えそうと云い出したが、息子はお目当の花が見つからないので頂上直下の吹き通しまで行こうと云う。地図を見るとそれほど遠くでもなく道も平坦であるので同行することになった。汗に濡れたシャツは乾き身仕度を整えてガマ岩を左に見ながら進む。

ガマ岩を過ぎて少し行くと小さな池が見えてきた。昨日の雨で水草が横倒しになっているのかと思ったが、この植物は、夕張岳・大雪山の高山湖沼中に生えるチシマミクリであることがわかる。湿原の登山道をさらに行くと、周辺に待望の植物が美しい花を咲かせていた。エゾタカネニガナ、シナノキンバイソウ、ユウバリキンバイ、ミヤマアケボノソウ、ミヤマリンドウ、リシリリンドウ、ユウバリリンドウ、ウメバチソウ、ムシトリスミレ、チシマフウロ、ウサギギク、ナガバキタアザミ、ムカゴトラノオ、レブンサイコ、イワオトギリ、チシマワレモコウ、エゾルリムラサキ、イワキキョウ、ヨツバシオガマ、シブツアサツキ、エゾノシモツケソウ、などであった。急ぎ足の、しかも登山道からの歩きながらの観察のために見過した花も数多くあったことと思う。コヒオドシチョウが多数姿を現わし、ヨツバシオガマ、シブツアサツキの花に飛来しては、吸密しながら翅を休めていた。しばらくして4番目（仮称）の水飲場に出る。空になった水筒に水をつめる。右

手の湿原にエゾノシモツケソウの大群落が見えてきた。遠望すると淡紅色の花が絨緞を敷きつめたように鮮やかに、湿原の植物から浮びあがり、夢を見ているような気持しばらくは時のたつのも忘れて見蕩れていた。

高山湿原が終り釣鍾岩を過ぎる頃に吹き通しに着く。時計は午後1時20分であった。これから急な傾面を約15分ほど登ると、いよいよ夕張岳本峰である。見あげると蛇行した細い道を数名の登山者が登ったり下りたりしている姿が見える。頂上から眺める景色は素晴らしいと思ったが、植物相が少ないとのことなので今回の夕張岳登山の終着点を吹き通しにきめた。この附近は蛇紋岩の小礫と粘土の出ている尾根上の平坦地でユキバヒゴタイがまばらに自生していた。この植物特有の濃緑色広卵形の厚葉を砂礫に接して広げ、茎頂には淡紅紫色の頭状花をつけ色鮮かに咲いていた。本峰の左側に大規模の崩壊地があり下方の傾斜地で1人の青年が腰をかがめて写真を撮っていた。私たちも足元に注意をしながら下りて行く。雨水に流された土砂の上に数株のシソバキスミレを見つけた。心臓形の暗緑色の厚味のある葉を広げているが、花は既に散って数個の果実をつけていた。下方から稜線を見あげると逆光を受けてナンブイヌナズナ、エゾミヤマトラノオ、ミヤマアズマギク、クモマユキノシタ、などの小群落が美しく風にそよいでいた。又、崖下の岩棚にはひとかたまりのタカネナデシコの淡紅色の花が色どりを添えていた。

午後2時、いよいよ吹き通しから下山をはじめる。いまきた道を分岐点までもどるのであるが、息子はユウパリコザクラ、シソバキスミレの自生地の写真が撮れないので気落ちしている。見るにしのびず私が登りながら4番目の水飲場附近の左手に踏み跡があったのを思い出し、私たちはひと足先に分岐点まで下るから、その間に踏み跡の奥に行くように勧めた。午後4時、分岐点に到着して、しばらく休憩していると、息子は晴々とした顔付きをして下りてきた。思っていたとおり踏み跡を辿っていくと崩壊地があり、まばらではあったがユウパリコザクラ（表紙写真）とシソバキスミレの花を見つけて写真に撮ってきたとのことであった。私たちには見ることは出来なかったが、息子が見たことで念願を果し得て安堵した。

分岐点から馬の背コースを下ることにした。緩やかな稜線に沿って登山道がつくられている。一見して歩きやすいように思えたが、足元は柔らかな黒土で滑りやすく、しかも汗ばんだ首筋に大きな虻が執拗に追つかけてくる。しかも水場がないので水筒の水を少しづつ飲みながらのダラダラ道の下山であった。登山道の両側は灌木や笹で見とおしが悪く、さらにヒュッテまであと何粁位あるのか標識もなく、ただ次第に近づいてくる渓流のせせらぎを聞きながら下山の位置を確かめるよりほかなかった。倒木の大きな木を乗り越えたり2度3度小高い山を登ったり下りたりしてようやくにしてヒュッテ前に到着したのが午後6時頃であった。

駐車場まで歩き汗に濡れた衣類を着替え

て札幌に向って車を走らせた。林道を過ぎる頃夕暮れとなる。農家では夕張メロンの集荷時刻であった。車を止めて夕張岳登山の記念にとメロンを買う。シウパウロ湖を通りながら夕張連峰を遠望する。残映のなかにけむる前岳・本峰を眺めながら今日1日の行程であの山まで歩いて行ってきたとは信じられないと妻は満足げに云った。帰路の国道は交通量が多く往路とは違い時間がかかり自宅に到着したのは午後9時をすぎていた。旅装を解き入浴して帰路に買ってきた夕張メロンを冷やして食べる。無事に念願の夕張岳に登り、美しい高山植物の数々を眺め、又、写真に写すことの出来た満足感を味わいながら時のたつのも忘れて話し合う。夕張メロンは美味しかった。

あとがき

山にはそれぞれの顔を持っている。夕張岳には懐の深いもの静かな顔があった。超塩基性岩という古い地質が登る私にそのような印象を与えたのかも知れない。私の拙文も夕張岳のようになにか躍動感の乏しい静かな文章となってしまった。今年の北海道は異状気象とも云えるほどに雨の少ない高温の日々が続いた。従って植物の開花期はいつもの年よりも早く、もしも私たちが7月上旬に登っていたならば、もっと多くの花が見られて夕張岳の素顔は又、違った陽気で明るい印象になったかも知れない。しかし花のシーズンも終りに登ったお蔭で花期の遅い（夕張岳固有種のリンドウ科のユウバリリンドウ）花に出合えたことは幸いであったとも云える。

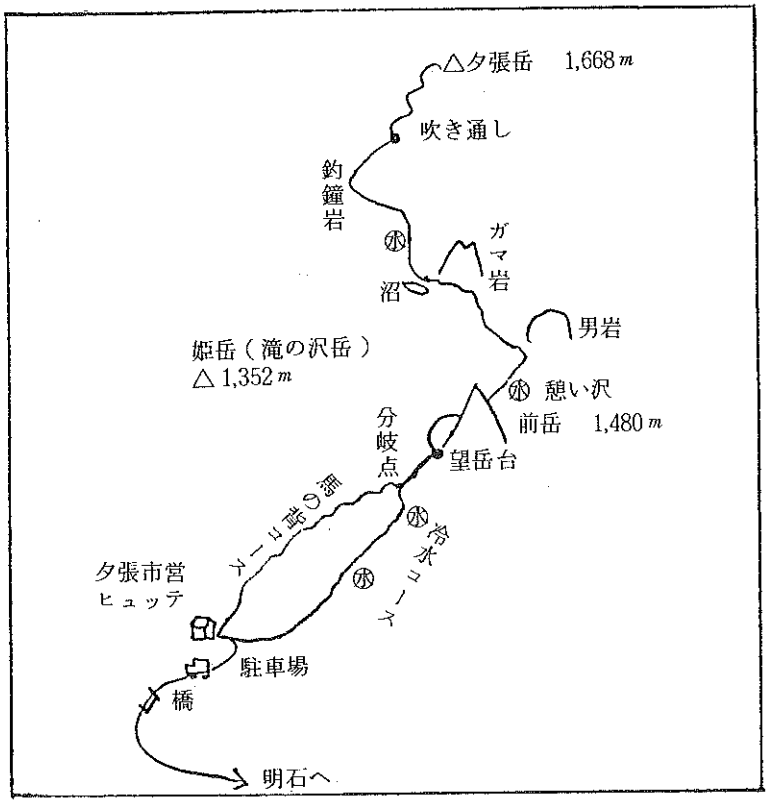
今回の夕張岳登山を終えての反省点をいくつかあげてみると、たゞ単純に登山のみを目的とするならば札幌からの日帰りコースでもよいのであるが、それぞれの花を時間をかけて観察し、又、最も良い条件で撮影をしょうと思うならば、日帰りコースは無理である。ヒュッテに宿泊しながら許されるならば登山道周辺以遠にも範囲を広げて探訪すべきであろう。しかし、植生保護の心構えは忘れてはならない。野坂志朗氏は当会会誌第3号に次のように記述しておられる。

「当山脈で唯一の広い湿原をもつとはいえ、その規模は決して大きくはなく、固有植物を含むそれぞれの群落も、不安定な岩棚や崩土上にハイマツの侵入を避けて辛うじて成立し、保存されているに過ぎず、人為による破壊は激甚であり、ユウバリコザクラ、シソバキスミレ等は激減し、タカネスミレ、チシマツガザクラ、リシリリンドウなどは絶滅に瀕している。登山道が整備されて登りやすいので、より有効な植生保護の対策が望まれる。」

この拙文がこれから夕張岳に登ってみたいと思う方々にとって、少しでもお役に立つていただけたら幸いに思う次第である。夕張岳は私にとって心のふるさとのような山であった。

参考文献

北方山草第3号・野坂志郎氏「夕張山脈の植物」・北方山草第4号・野坂志朗氏「夕張岳の超塩基性岩地帯（蛇紋岩地帯）の植物」・梅沢俊氏「北海道花の散歩道」・

アルペンガイド北海道の山。

夕張岳登山コース